

鹿児島（鶴丸）城跡の構造と熊本城～最新の発掘調査成果から～

熊本県教育庁教育総務局文化課（鹿児島県立埋蔵文化財センターより派遣） 西野元勝

1 はじめに～鹿児島城跡とは

鹿児島城は、薩摩藩の本城で、

別名鶴丸 城 と呼ばれています。

この城は、初代薩摩藩主、島津

家久が慶長 6（1601）年頃から

築城を始め、慶長末（1615 年）頃にほぼ完成したとされています。築城当初は背後にそびえる

城山に本丸、二ノ丸を置き、山麓

部分に屋形造りの平城を置いて居所としていました。江戸時代後半には、城の中心が平地部分に移ったため、本丸、二ノ丸は平城に移されました。

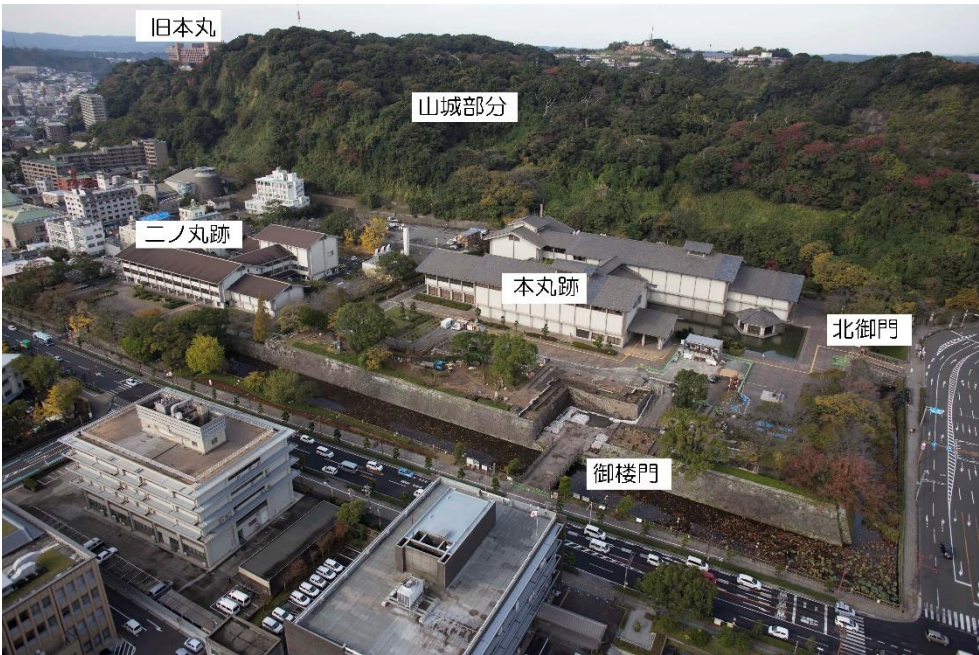
明治時代に入ると、本丸には鎮西鎮台第二分営が置かれていましたが、本丸の建物は引き続き利用されていきました。しかし、明治 6（1873）年の大火事で本丸の建物はほとんどが焼失しました。さらに、明治 10（1877）年には、西南戦争の戦場になったため、わずかに残っていた倉庫も焼失してしまいました。その後、本丸は、県立中学校造士館、第七高等学校造士館、鹿児島大学文理学部・医学部などとして利用され、昭和 53・54 年の発掘調査を経て、現在は鹿児島県歴史資料センター黎明館（以下、黎明館）が建っています。

2 熊本城との違い

熊本城が台地の上に築かれているのに対し、鹿児島城の中心部は、平地の館と背後の山城の両方で成り立っています。また、鹿児島城は熊本城と比べ、石垣は低い、堀は狭くて浅い、複雑な枅形もない、天守や櫓といった高層建築もほとんどない、といった違いがあります。一見防御の面では弱いように感じますが、有事の際に立て籠る山城部分は、切り立った崖がめぐるシラス台地の要害で、頂上付近を中心に土塁や曲輪も築かれています。さらに、山城跡などを利用して要害とし、周囲に武士を住ませた

外 城 が藩内には最大 110 ヶ所置かれており、藩全体がいわば大きな要塞となっていました。

鹿児島城のもうひとつの特徴は、海がとても近いことです。城内には、海に面した交易に関する築地を含み、築地の近くには琉球館もあります。城下町も海沿いまで広がっており、港湾都市としての性格もありました。幕末には城内に蒸気船のひな形を造った精錬所がおかれ、本丸と庭園との間で日本初の電信を行うなど、科学技術の実践の場所でもありました。鹿児島城は常に海の外に目を向けた城でした。



3 最近の発掘調査の経緯

鹿児島城跡では、木の根の張り出しなどの様々なことが原因で、

石垣に

間があります。そのため、黎明館を中心に、史跡の保全を目的とした

調査・測量などを行って、必要な場所には修復工事を

行う鶴丸 城 保全整備事業が実施されています。発掘調査は、この鶴丸城保全整備事業の一環として行われています。平成 26 年度から現在までの間に、本丸跡の

御楼門跡や北御門周辺の石垣の修復、御角 櫓 の整備、第七高等学校同窓会記念碑移設のための調査を行いました。

4 発掘調査の成果

発掘調査の成果は、さまざまな分野に及びますが、今回は特に大きな成果である、①御楼門の地下構造、②本丸の排水機能、③能舞台跡、④西南戦争の爪痕、⑤特徴的な出土遺物の 5 つについてご報告したいと思います。

（1）御楼門

（1）御楼門

平城の正面には、御楼門が置かれ、元禄 9 年に火災により焼失しましたが、宝永 4（1707）年には再建されました。その後、数回の建て替えを経て、明治 6（1873）年に再び火災で焼失しました。この門

は、琉球王の世継訪問などに使われた儀礼用の門で、

鹿児島城を象徴する建物でした。明治時代に撮影された写真から、この門は二重二層の武家門形式で、屋根は瓦葺き、外壁は漆喰塗の瓦を打ち付け、目地に漆喰を塗った「なまこ壁」であったことが確認されています。

発掘調査では、門の基礎や坪地業、三和土の痕跡が確認され、多くの瓦が出土しました。

坪地業とは、穴を掘って、その中に拳大に砕いた溶結凝灰岩を突き固めて柱の基礎を造ることで、二ノ丸跡や島津家の菩提寺である福昌寺跡の建物でも確認されています。

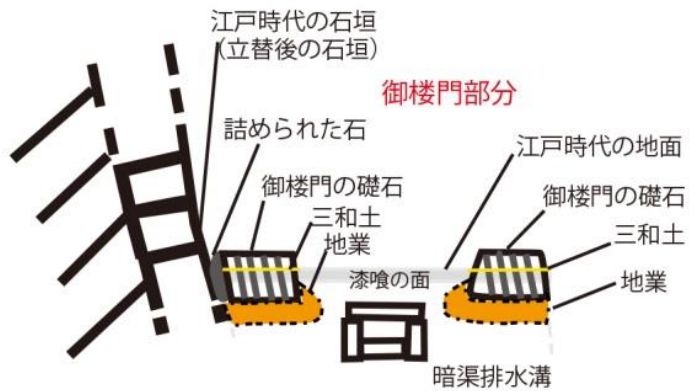


▲明治初期の御楼門
(写真提供：鹿児島県立図書館)

平成 32 年 3 月の完成を目指し、現在、御楼門の再建が進められている。

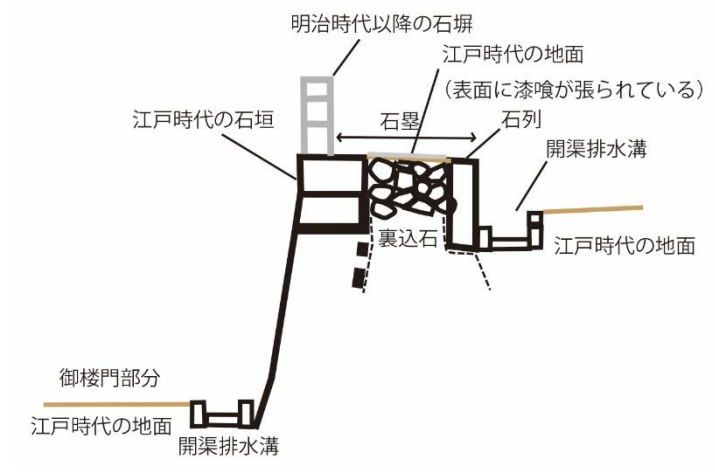
表 1 鹿児島（鶴丸）城跡関係の略年表

和暦	西暦	主要なことから
南北朝時代		城山に、上山氏によって上山城が築かれる。
天文 8 年	1539 年	島津貴久により上山城が落城する
慶長 5 年	1600 年	関ヶ原の戦い、徳川家康が江戸幕府を開く
慶長 6 年	1601 年	上山城普請
慶長 7 年	1602 年	島津家久が鹿児島（鶴丸）城の築城を始める
慶長 9 年	1604 年	島津家久が内城から鹿児島城に移る
慶長 11 年	1606 年	御楼門板橋の渡り初め
慶長 17 年	1612 年	御楼門の柱立
慶長 18 年	1613 年	堀普請・蔵の柱立
慶長 20 年	1615 年	最初の武家諸法度が発布（新規の築城、無断改修の禁止など）
寛永 16 年	1639 年	城内の屋敷の立て替え、石垣修復
寛文 4 年	1664 年	鹿児島城南方の石垣二箇所が崩壊
寛文 8 年	1668 年	鹿児島城居所（現在の本丸）の堀、待屋敷廻の堀二箇所の浚渫の願が許される
延宝 5 年	1677 年	鹿児島城東北門破損、東北に新規建立の願が許される
元禄 9 年	1696 年	鹿児島大火、場内に延焼、鹿児島城本丸焼失
宝永 4 年	1707 年	鹿児島城本丸作事終了
安永 2 年	1773 年	藩校造士館・演舞館が完成（現在の中央公園）
文化 7 年	1810 年	御楼門前の板橋を石橋に改める願がだされる
文久 3 年	1863 年	薩英戦争、本丸大奥二階や御楼門跡に砲弾命中
明治 4 年	1871 年	廃藩置県により、鎮西鎮台第 2 分営が置かれる
明治 5 年	1872 年	明治天皇行幸
明治 6 年	1873 年	鹿児島城本丸が炎上
明治 10 年	1877 年	西南戦争、二丸が炎上
明治 17 年	1884 年	（県立）中学校造士館設立
明治 34 年	1901 年	（官立）第七高等学校造士館設立
昭和 20 年	1945 年	空襲により校舎全焼、石垣一部崩壊
昭和 27 年	1952 年	鹿児島大学文理学部全焼
昭和 32 年	1957 年	鹿児島大学医学部、鴨池より移転
昭和 35 年	1960 年	石垣一部崩壊
昭和 49 年	1974 年	鹿児島大学医学部、宇宿へ移転
昭和 53 年	1978 年	鹿児島城跡本丸跡発掘調査（～1979 まで）
昭和 58 年	1983 年	鹿児島歴史資料センター黎明館開館
平成 10 年	1998 年	鹿児島城跡石垣一部が崩壊
平成 11 年	1999 年	御角櫓跡発掘調査、石垣修復
平成 27 年	2017 年	鹿児島城跡跡発掘調査開始



▲御楼門周辺の地下構造

(2) 本丸の排水機能



▲御楼門裏側の石垣と排水溝の関係

御楼門周辺の石垣の裏や御楼門、御兵具所跡、御角 櫓跡では、石組みの排水溝が確認されました。また、黎明館と県立図書館の境では、堀が確認されました。排水溝は石垣の周囲をめぐるような形で確認され、御楼門のある正面の石垣だけは、わざわざ見えにくい場所に排水口を造っていました。この成果により、本丸部分がどのように排水を処理していたかが明らかになりました。

(3) 能舞台跡

能舞台の橋掛り部分の床面を確認しました。橋掛りとは、「本舞台」と「鏡の間（楽屋）」を結ぶ廊下です。床面は半円形の溝状で、硬化面の上に漆喰を敷き固めていました。これは、橋掛り上での演技で出す音がより響くための、音響効果を高めるための工夫であると考えられます。

薩摩藩主島津家では、初代藩主家久や8代藩主重豪、

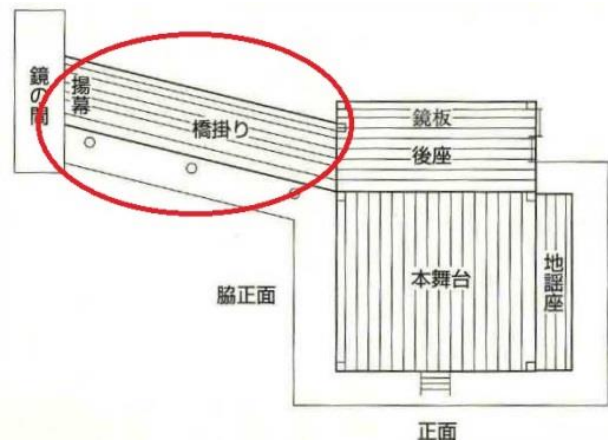
幕末の国父久光などが能にとっても打ちこんでいまし

た。また、幕末の四賢公の一人にも数えられる 11 代

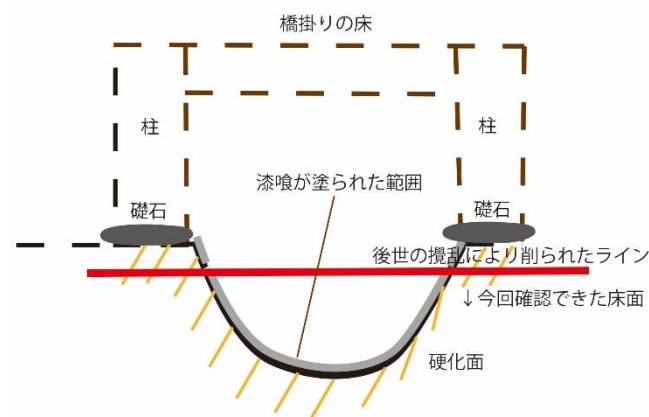
藩主斉 彬 や天 璋院篤姫もこの能舞台で能を鑑賞したと記録に残っています。この発見は、島津家が武術だけではなく、文化・芸術に力をいれていた証拠といえるでしょう。



▲御楼門裏側の排水溝



▲能舞台の概念図



▲能舞台跡橋掛り部分の模式図



▲能舞台跡橋掛り部分

(4) 西南戦争の爪痕



御楼門周辺の石垣を清掃したところ、無数の穴が見つかりました。この穴は、明治 10 年（1877）の西南戦争の際の弾痕であることがわかりました。いくつかの穴の中には、銃 弾・砲弾片が残っています。明治 10 年 9 月、熊本・宮崎での戦いに敗れた西郷隆盛を中心とする薩軍は故郷鹿児島島の地に戻り、城山を中心に布陣しました。明治新政府の官軍は、約 5 万人の兵でこれを包囲し、無数の銃弾・砲弾を城山や鹿児島城にこもる薩軍兵に浴びせました。御楼門周辺に残る無数の銃弾は、官軍の攻撃のすさまじさを伝えています。国内最後の内戦という日本史上の転換点となった西南戦争を考える上で貴重な痕跡です。

(5) 徴的な出土遺物

鹿児島城跡では、これまで多くの遺物が出土しています。最も多いのは瓦です。鬼瓦は数種類出土し、キリシタン瓦も出土しました。家紋が入った瓦も出土していますが、ほとんどが牡丹文で、実は、丸に十の字の瓦は一点も出土していません。また、上質の薩摩焼や、中には、オランダの書物を見て造られた日時計も出土しました。

